

人間尊重のマネジメント研究部会

向日恒喜（むかひ つねき）
中京大学経営学部

1. 研究会の概要

本研究部会は、2018年に設立された「人間尊重のマネジメントの心理・行動的側面研究部会」を前身とし、「人間尊重のマネジメント」と名前を変えて活動を進めている。

近年、ブラック企業、働き方改革、心理的安全性、ワーク・エンゲイジメント、人的資本経営といった言葉がメディアを賑わせているが、その背景には、働きやすい環境を設けることによる生産性の向上への期待が存在する。一方で多くの企業が働きやすい環境の導入に躊躇している現実があり、その理由として、そのような環境がどれだけ企業の生産性につながるかが定かではないことが挙げられる。

そこで本研究部会では、働きやすい環境と生産性との関係を明確にし、人間を尊重した働きやすい職場を拡大することに貢献することを目指し、活動を進めている。

2. 研究部会の活動

前回の普及誌の原稿以降、2回の研究会と1回の支部セッションを開催した。

(1) 研究会

2022年5月には「働く人々の自分らしさについて考える」をテーマに、以下の通り研究会を開催した。

研究報告

「自己の多面性とアイデンティティについて」

木谷智子氏（比治山大学現代文化学部社会臨床心理学科講師）

自分らしくあることがメンタルヘルスにおいて重要とされている一方で、職場で働く人々は、職場、

家庭、地域コミュニティなどから多くの役割を求められることで、アイデンティティの拡散に直面する可能性がある。研究報告では、多様な場を適所として認識して自己を変化させ、それぞれの場でアイデンティティを確立して環境に適応している青年群の存在が紹介された。そして、多元的なアイデンティティを維持していくためには、自分の中の異なる自分の間につながりを持たせ、調和を保っていく必要性が提案された。

2023年3月には「職場のユーモアと心理的安全性」をテーマに、以下の研究会を開催した。

研究報告

「職場におけるユーモアの光と影：心理的安全性との関係から」

丸山淳市氏（中京大学職員、博士（カウンセリング科学））

働きやすい職場に注目が集まる中、従業員のユーモアを奨励する企業の成功事例に注目が集まっている。研究報告では、自身のエピソードを開示するような話題で構成されるユーモアは職場の心理的安全性やパフォーマンスなどにポジティブな効果をもたらす一方で、部下や同僚の失敗を揶揄するような話題で構成されるユーモアはネガティブな影響をもたらすことなどの結果が紹介された。そして、部下のユーモアと上司のリーダーシップスタイルとの関連性を示す結果についても報告がなされた。

(2) 全国大会での研究部会セッション

2021年11月の全国大会で研究部会セッションを開催した。「ケースメソッドの開発と活用に関する一考察」、「実証主義の再考とシステムズアプローチの可能性」、「定量的研究と経営実務との溝に関する

一考察」の3件の研究報告がなされた。

報告を受けて、個々人の文脈や感情など、多様な側面を持つ人間をどのように捉え、またどのように働きかけるかについて、実務の視点から、また研究の視点から、報告と意見交換がなされた。そして、職場の人間を理解する上でも、また研究者が実務家を理解する上でも、さらには実務家が研究者を理解する上でも、それぞれの文脈を理解する姿勢が重要であるとの議論が展開された。

3. 研究と実務の橋渡し

筆者が研究部会を始める際には、心理学や組織行動の分野に、働きやすい職場に関する問題を解決する鍵が多くあると感じ、それらと実務との橋渡しを意識して研究部会をスタートした。しかし、この5年間の活動を通し、その橋渡しが容易ではないことを実感させられた。特に定量的研究と実務との間に以下のような大きな溝が存在している。以下、研究部会セッションで筆者が報告した内容に基づき、その溝について簡単に紹介させていただく（向日、2021）。

(1) 定量的研究に対する理解の溝

1つは定量的研究に対する理解の溝である。実務家は現場で使えるシンプルかつ効果的な解決策を求めている。これに対し、定量的研究は一見、使いやすと思われるシンプルな結果を提供している。しかし、そのモデルの説明力は10~20%程度のものも多いため、実務家も直感的にそのようなモデルが

現場にそぐわないと感じる。一方、研究者がモデルの説明力を上げようとすると、モデルが複雑になり、実務家が理解し難いモデルとなってしまう。

(2) 研究の目的の溝

もう1つは研究の目的の溝である。実務家は研究に対して企業の利益につながることを期待しているのに対し、研究者は企業の利益の有無に関係なく事実を明らかにすることを目指している。そのため研究で明らかにされることは、必ずしも実務家の期待に添わないものとなっている。

以上から、実務家は定量的研究に対して過剰な期待をしてしまっており、また研究者も定量的研究の有効性を誇張して発信してしまっていると言えよう。定量的研究で示されていることは複雑な社会に組み込まれている複雑な人間の側面にすぎないことを、実務家も、また研究者も踏まえる必要があると考えられる。研究部会では、そのことを踏まえながら、研究と実務の橋渡しを意識しつつ、さらに企業組織における人間について検討していきたいと考えている。

研究部会の開催はJASMINの学会サイトやメルマガで案内をしているので、関心のある方は、ぜひご参加いただきたい。

参考文献

- [1] 向日恒喜「定量的研究と経営実務との溝に関する一考察」『経営情報学会2021年全国研究発表大会要旨集』2021年、pp.413-416.